

目次

昭和九年	
第三回本部展口絵写真 六
第三回本部展大型犬審査感想 平岩・安達 六
第三回本部展中型犬審査感想 塩原・北村 六
外国書に現はれた日本の犬と狼(二) 平岩米吉 五
犬に関する展覧会 五
ハチ銅像竣功報告 五
昔の犬体各部の名称 斎藤 弘 六
樺太と北海道の犬(第二報) 小松真一 六
岐阜県調査記 墨 国太郎 六
島根県那賀郡調査記 中村 鶴吉 七
山形、福島県境調査記 久米清治 七
紀州熊野猪犬に就いて 藤田 邦一郎 七
日本犬標準の制定 日本犬保存会 七
紀州名犬語り草 石原 謙 八
昭和十年度役員 八

紀州名犬語り草

石原 謙

熊野一帯に於ける名猪獵犬として今日尚其の名声を誦はるるものは、畝畑義清犬鉄号・色川成滝犬イチ号・中之川喜一犬ハチ号の三頭である。何れも紀州犬の本場那智裏郷を出生地として居る。

〔註〕 那智裏郷に於て犬の名の上に所有主の家号又は氏名を附し、所有者を明にして居る。即ち前記畝畑義清犬鉄と云へば畝畑といふ在所の義清といふ人の飼育して居る鉄といふ犬の意である。之は当地方古来より名物競技たる「牛の田掻」の呼称に由来してゐるやうである。何れにしても現在のケンネル・ネームに類する呼称であつて、真に結構な事と思つて居る。

鉄号・イチ号は共に三重県に身売せられて各々其の地に於て死亡したのであつた。

〔註〕 鉄号は三重県木之本町仲孫三郎氏宅に於て昭和六年十月死亡。イチ号は三重県中尾熊太郎氏の許に於て昭和二年頃死亡と聞く。

共に同時代の名犬であり、遠く故郷を離れて其の名を誦はれつつ他県に至つて死んだのも奇しき縁といふべきか。ひとり喜一犬ハチ号は、よき飼主の許に満三ヶ年あり六歳の春猪犬として春秋に富んだ年齒を以て死亡した事は惜しみて余りあることである。

之等三頭の名犬に就てはあまりにも多くの言ひ伝へられた獵芸がある。私は今日までも之等名犬の作出者に面会して座談的に聞きもし話しましたが今此処に改めて御紹介する事を何より仕合せに思ふものである。

一、喜一犬ハチ号に就て

去る八月十八日午後喜一犬の飼育者であつた上太田村中ノ川阪本喜一氏

当の年月を仕込めば良い犬になるだらう位は思つてゐましたが、初めて山馴れさす為に山に入れて猪を出すなどは夢想だになつたのです。これはうまい事をしたと思つて其の話をすべく私の兄弟のやうにして居る直柱の門氏の処へ廻りました。そして門さんと二人で二時頃又山へ入れて見ました。処が又夕方方一頭の小猪を出して来たのです。初めて山へ入れて一日に二頭の猪を出した訳です。私も今日迄犬も相当飼ひ、仕込んでみましたがこんな犬は始めてでありました。其の翌日高野で山へ入れ又一頭出して来ましたが、私が打ち方がまずくて手負にしてしまいました。それをハチが噛みに行つて腰をほんの少しばかりかけられました。之も二の谷へかかつて留めました。ハチは勿論耳の小さい体格の大きいやま毛の犬でした。私が手に入れて二年目からは大分落着きも出ましたが友犬に悪いことは依然として同じことでした。私は其の頃は元氣もあり獵期外でも有害獣駆除の許可で猪打ちをやりましたがあちらこちらの在所からのまれて、初めての土地へ行きましたがハチは必ず猪を打たしてくれました。何しろ二年目からは猪が居るといふ山へつれて行つて寝屋が近くなつたといふははいすばつて木など噛んで動きません。これは寝屋が近くなつたといふ事を知らずのです。之を合図に放してやると必ず寝屋の下手から近付いて行きました。ところがハチのどの犬よりも良い処で猪を寝屋止めにするには必ず寝屋の下手から行かねばならない。上手から行けば早く知られて猪をどらしてしもふ。(逃げ出させるの意)ハチは寝屋へ行つても決つてのべつに吠えを入れません。ひつきりなしに寝屋で吠えれば猪の氣を立たせません。ハチの吠えは切りを切つて吠へました。即ち猪が寝屋から移動せんとすれば吠へ、猪がちつとして居れば吠えませんが、どちらかへ逃げやうとすれば吠えるのです。だから私が寝屋まで行く間充分猪を寝屋で止めて居てくれました。私の撃つた猪は大抵鼻柱を撃つて居ましたが之はハチが寝屋で止めてくれるのを近所まで行つて撃つからです。撃ちそこなつた猪を追つて行く時も、決つて追吠へ〔註〕追吠えとは猪を追ふのに吠えながら追つて行くことで之は猪の移動する方向を知らしむることになる)はしなかつた。必ず次の谷で吠えて居た。そこで猪を止めて居ました。大

(六十八歳)が病氣保養の爲中里(下太田村)へ来て居らるるのを聞き同村在郷軍人分会長大野修二君の案内にて会談する事を得た。翁はありし日の花々しかつた記憶を回想しつつ顔面紅潮、さもうれしげに犬談教刻に及ぶ。出された茶菓子を頂戴する暇もなく、文字通り趣味話に終始したのであつた。

猪犬は猪を寝屋で止める犬でないと駄目です。ハチなどは四十貫の古猪でも十貫の小猪でも必ず寝屋で止めて撃たしましたよと冒頭して語る。

〔註〕 寝屋とは猪の居る奥とも云ふべく日当りの良い傾斜面になつた山の中腹で羊歯や茅を折り敷いて居る。寝屋で止めるとは猪が犬の来たのを知つて寝屋より逃げ出さんとするのを其の先に廻つて吠え込み逃げ出せないやうに道を塞いで寝屋で止めておく事を言ふ。

その犬は大正十一年六月色川村滝本の谷瀬さんのうちで一匹仔として生れたのであつた。谷瀬氏は代々犬を絶やした事のない家でその頃の牝牝は共に地方切つての猪犬でした。ハチが生後二ヶ月で色川村阪足の横手浅吉さんの宅へ貰はれて来たのですが大きくなるに従つて大へんな荒犬になりました。猫は噛み殺す近所の犬は片端からやつつける遂には知らない人に飛びかかるなどその上身体が普通の犬の倍もあつたので横手さんも随分困つたらしいのです。この地方では友人に悪い犬は一緒に仕込みに連れて行つてくれません。いくら荒いからと言つて猪にも使つてみず単にそれらの理由で再三ならぬ懇望の下に貰つたものを今更返す事も出来なかつたのです。当時私は従来飼育して居た犬が猪に斃されたのであちこち犬を物色してゐました。その話を聞き早速横手さんに懇望してみました。横手さんは之を谷瀬さんに譲り譲つてくれる事になりました。いくらもてあました犬といつても名ある犬の蔓です、私は三十円包んで酒二升を持つて行つて貰ひました。早速其の翌日自分の家の近くで先づ山に入る事に馴らさうと思つて山へ入れました。流石名犬の蔓だけに喜んで山へ入りました。なかなか出て来ません、これは旧主の許へ帰つたなと思つてゐました処向ふの谷で吠えてゐるやうです。之は変だなどと思ひながら急いで行つて見ると十貫余りの小猪を追ひ出して来たので早速私は之を撃ち止めました。私は相

体昔からよい猪犬は追吠えなどしなかつたものです。近頃の人は追吠えするのをまるで手柄の様に言ひますが追吠えする犬に耳の小さい、前頭の張つた犬がありますか。追吠えするのは伶俐なだけに他の犬(洋種)が混つて居るのです。

〔註〕 追吠えに就ては異説もありますが大体古老獵夫が一樣に翁と同じことを言つて居ります。今春里田理事の御供をして和深の愛犬家であり実獵家として名ある藤田邦一郎氏を訪問したことがあつた。此の時も追吠えする犬の純血に非ざる事をよく語られて居た。同時に氏は曰く「当地方は冬期暖い関係か猪がうんと集るので各地から山稼ぎに来られる。自然各地の名犬も集ることになるが、今日まで喜一犬ほど凶抜けた猪犬を見たことはない。私の宅へ喜一翁が着いたのは一時頃で一休みしてすぐ其の足で近くの山へ入り、短時間の中に二頭打ち止めたのを記憶して居る。私も名犬だ名犬だといふ犬を見せて貰ひ使つても見たが喜一犬の様なのはただ一匹だ」と激賞せられた氏は現に喜一犬の直系を飼育して居られる。確か八歳とか九歳とか承つた。これも父犬の名を恥しめず優秀なものである。

これ程のハチも昭和二年の三月私の手に来てから満三年猪のうきぎも(猪の肝の傍らについて居る白い肝様のもの)を与へたのが原因で猪犬としては五歳といふ若犬で死んだのです。私は以前から飼犬は家内だと常々言つて居ました。ハチなども千五百円とか千八百円とか言つて譲渡方を申込んで来ましたが決して耳をかさなかつた。又死んだ時も自分の家の墓へ葬りましたよ。

ハチの仔によいのがありましたが、私が病氣を始めましたので、例へ治つても今までの様に山稼ぎも出来ません。あちこちにも蔓は相当殖えてゐるつもりです。と語つてくれた。

〔註〕 私の知つて居る範囲ではまだ三頭ばかり、ハチ号の系統を継いでゐるものを知つて居るが皆猪犬として一家をなして居る。

門英次氏に就いて寸言
門英次氏は東牟婁郡色川村真柱の人にして若い頃より連続三十余ヶ年猪

獵を副業的にやつて居られる方である。当地方切つての猪獵犬の草分であり名ある猪犬にして氏が曾て使はないといふ犬は無いと言つて良い。氏が「私はまだ使つた事はないが良いさうです」と言へば其の裏面の解釈として「大した犬でない」事になる。同時に優秀犬の作出者であり昨年まで成滝犬と義清犬の直系を飼育して優秀犬の作出に努力せられて居た。氏の犬の見方の第一は「面を一見して耳が、第一に目に着く犬より目の良い犬でないときらいだ目の気に入る犬となかなか見当るものではない。鉄号の目も悪くなかつたがイチ号の目は良かった。近頃私の宅に出来た「ぬたイチ」(現在東京渋谷の愛犬家岡本吉氏飼育)の目こそ成滝犬以上のすばらしい目だつた」と言つて居る。何れ機を見て氏の犬の見方をも発表し度いと思つて居る。

二、成滝犬イチ号に就いて

かねて成滝(家号にして色川村溝義太郎君)が下つて来たなら(在所から海岸町村へ来ることを言ふ)一度詳しくイチ号の話を聞きたい旨を門英次氏に依頼しておいた処九月四日氏が所用の為に勝浦へ来らるる旨の通知を受けたので当日勝浦に出張江戸屋に於て会談する事を得た。

イチが私の処へ来たのは生後二十六月目で高田村の松原といふ殺生人に五十円といふ金で買受けたのです。今でこそ仔犬の五十円は良系統のものなら普通の値段ですが大正七八年頃です。仔犬一頭に五十円も出したといつて近在の獵仲間には笑はれました。大変おとなしい犬で大きくなつてからもごろ寝してばかり居て誰が名を呼んでも知らん顔をして見向きもしなかつた。大ていの人はイチの様に凶太く出来て居る犬は初めてだ。将来どえらいものなるつもりだらうよ。とひやかし半分にはわらひました。

〔註〕 当地方では仔犬選定の方法として数頭の中より最も小さいものを選べどか中犬(成犬の若いもの)ならば二度呼んでも振りかへらないのを選べなどと言はれて居る。

七、八ヶ月位から以前より飼ふて居た牝と一緒に山へ入れたがいつもはぐれて向ふの山でオオと悲しさに遠吠へをして呼んでくれるのを待つて居ました。三歳位までは私も「こいつはどうもしくじつたわい」と独り

の獵慾のせしむるもので相当名ある犬ならそれ位の事は大ていしますよ。勿論イチは体が大きかつただけに寝屋近くになるととも犬を止めておく事が出来ません。大ていな処まで行けば放す様にして居ました。イチをあてにして鑑札を受けた人は五人や八人ではなかつたのです。

〔註〕 在所に名猪獵犬が居れば狩獵免許状を受けて共に山稼ぎに行き猪を獲れば其の分前を貰ふことが出来る。即ち当地方では猪獵には獵仲間を誘ひ合はせて山へはいる。獲つた獲物は処分して各々等分に按つことになつて居る。狩獵に経験のある者ならば鉄砲がなくとも犬を飼育して居なくとも共に参加することが出来る。

イチが九歳の頃継犬が出来たので懸望されるままに伊勢の中尾さんの家へ譲りました。中尾さんは大変気に入つて居られたが間もなく死んださうです。あきらめかねたと見えイチの系統を物色して来られました。当時門さんが飼ふて居られた若牝を三百円で譲つたことを知つて居ります。

〔註〕 此の系統に属するものは成滝自身飼育して居た直系牝は其の後死亡して継犬なく門氏飼育の牝牝中牝は前述中尾氏に譲渡牝は其の後義清犬鉄の直系「ハチ」と交配盛に作出現在各地で自慢に飼育して居るものに此の系統が多い。此の直系の牝も昨年十一月死亡した。

三、義清犬鉄号

鉄号作出者上尾義清氏に十月二十日川村籠にて面談する予定の処氏の都合により二十五日に延期された。色川村は平清盛隠遁の地として知られるも交通の便欠け、旅館なき処前日より同地に到り同好の士渡瀬氏宅に一泊当日午後二時上尾氏参着会談することを得た。

鉄は私が前から飼育して居た牝と伊勢の岡本清作といふ人の牝との間に生れたものであります。父犬母犬とも猪獵犬として有数なものでしたが、特に母犬はすばらしい名犬で伊勢から畝畑まで自慢の為に猪獵に來られたこともありました。

〔註〕 近來牝犬の優秀なものは相当見受けられるが牝に至つては甚だ細い。牡さへよければといふ風に考へる人があるとすれば其は大なる間違である。牝が系統正しく優秀なるものであれば其の仔犬には充分信を

がつかりした事が幾度あつたかわかりません。ただイチの父犬母犬とも私の知つて居る大変良い犬でしたからイチも良くならねばならぬ犬だと随分辛抱に仕込みました。おかげでだんだんよくなつて来て四歳の暮にはもう牝よりも良くなつて来ました。蔓も良かつたが私と門さんと二人でこのイチにかかり通したのです。あれ程熱心に仕込むなら普通の獵犬の仔だつて相当なものになるでせう。イチは上背のあつた大型のもので色はぬたげでした。

〔註〕 外貌上の印象に就いて上太田村田中繁一君の話によれば「実に堂々たるものでいくら他の犬が吠へても知らぬ風をして居ましたが一度怒つた時は相手の犬は皆ちぢみ上りました」

イチ号が一獵期に四十一頭の猪を獲つた事があります。申すまでもなく猪を寝屋で留めてくれました。其の頃荒猪が多くて一度寝屋を逃がすとイチは噛みついて猪に曳きづられながらこの谷へかかつて来たのを朋輩が見付けてもどうすることも出来ない事が度々ありました。(此の場合猪を射れば犬も共に射つ心配がある)追鳴きは一切しませんでした。

〔註〕 氏は追鳴きについてやはり喜一老と同じ意見である。鹿なら追吠えしてもらはねばならぬが猪に追鳴きする事は猪のとまりを悪くすると語られた。

寝屋で吠へつづける犬は主人の来る迄猪を留めておくことが出来ない。イチなど寝屋へはいると一生懸命相手を睨んで猪が動かうとすると吠へる動かなければそのまま睨み続けて居た。さうなると猪が犬の術にかかつて逃げられない様になるのです。

〔註〕 此の辺の言葉は喜一老の話と共に含蓄のある言葉である。この呼吸が喜一老にしても義太郎老にしても名犬をそのままに使役して見て初めて然も充分経験出来たことで名猪獵犬の獵芸たるや実に神技に近いとは此の間の表現に外ならない。

寝屋近くになると木の根などを噛んでポイント様のことをするかと言はれるのですか? そんなことは珍らしいことではありません。はいつくばつて木の根などを噛んでポイント風の事をするのは早く寝屋へ行き度い為

おくことが出来る。牝犬が如何に優れて居つても、牝犬がよい加減なものならば其の犬は期待し得られない。私をして言はしむれば、今日に於ける優秀犬作出の第一歩は先づ優秀牝犬に関心の重点を置くべきである。牝犬の優秀なるものは各地に飼育して居られるから其を利用するから決して交配にはこと欠く事はないと思ふ。

鉄もさうでしたが、兄弟全部白地に黒の差毛のある茶の白斑でした。揃つて猪獵を相当地やりましたが鉄とは比較にならなかつた様です。

〔註〕 本年九月日本犬標準が制定せられた。同表に依れば斑は減点となつて居る。何れ来る十一月三日の展覧会拝見に出かける予定であるからその機会に先輩方々の御高見を伺ふつもりであるが恐らく中央の方々は斑の優秀なるのを御覧にならなかつたのではなからうか? 動物学的に斑の不可が立証せらるるならば兎も角紀州犬の使役目的を広範囲に拡げて居る今日、斑も決して悪くない様に思つてゐる。何れ後日愚見を申上げ

る事にする。

鉄の仔犬時代は胆が太かつたのか、おとなしくあまりたわむれなどしませんでした。初めて山へ入れたのは満二歳の秋ですが大猪に出遇つて若かつた為でせうが早速寝屋へ飛び込んで遂に逃がしました。其の年と其の翌年はみつちり仕込みましたが満四歳の冬は随分すぐれた猪犬になりました。肩の高さが一尺九寸、体重八貫もありましたから大猪は寝屋で留めませんが中猪小猪なれば何時間かかつて喰ひ留めました。一日の稼ぎから帰つて来ますと、傷だらけの面をして居りましたが、これは猪と噛み合つた傷あとです。猪を噛み留める時は鼻頭を唯一の目標として攻撃しましたから時には猪の頸を噛み折つて居た事など度々ありました。全盛時代は五歳から八歳まででしたが一獵期に大猪二十七頭獲つた事があります。勿論小猪で遠くまで追つて行つて喰ひ殺し、そのままになつてしまつたものが何頭あつたか分かりません。鉄は至つて人にはおとなしく、友犬を見ても決して好んで相手にはしません。短い期間で獲つた記録は和深、江住の方へ一週間行つて大小の猪混せて六頭獲つた事があります。寝屋で留まる猪なら私が行くまで留めておりました。寝屋から猪がとれても決して追吠きは

